

離島における集落空間に関する研究



K08121 横田 直道

— 来間島を事例として —

Keywords

集落空間 屋敷空間 居住空間
ムラ生活 家族生活 個人生活

1.1 はじめに

日本は、数多くの島から成り立っている。大半の有人離島では、少子高齢化が著しく進行し、労働力の減少、医療・福祉の負担増加、児童・生徒の減少など多くの問題を抱えている。しかし、離島地域では、その閉鎖的環境ゆえに他から直接的に影響を受けることが少ない。古くから集落が数多く残り、それらは地域の歴史、文化、風土の蓄積とともに自律的な地域として成立してきた。独自の歴史、文化、風土を守り続けていくことにより、現在もなくなることなく存在し続けている。

本研究では、宮古郡島の来間島を事例とし、離島に住む人々の生活習慣、居住空間、屋敷構えの特徴を明らかにし、集落空間がどのように組織されているかを考察していく。

1.2 研究方法

本研究は、2011年7月25日～2011年8月10日（17日間）の日程で、沖縄県宮古島市下地地区の来間島集落で実施した現地調査に基づいている。現地調査では、住宅の平面図、屋敷図、生活用品の実測と、住民へのインタビューを行なった。インタビュー項目は、家族構成、建築年数、各部屋の名称・利用法等である。これらの調査結果に加え、文献調査も加えながら研究を進める。

2. 調査地の概要

2.1 来間島の特徴

研究の対象となった来間島は、沖縄の宮古島から1.5km離れた離島である。面積は2.84km²、周囲9.0kmと小さい島である。平成23年1月末現在の人口は91世帯で、163名（男性81名、女性82名）である。65歳以上の人口は87名で、高齢化率52%と超高齢で限界集落となっている。電話の開通が1964年、電気の送電は1969年、水道は1976年に付設された。1995年に宮古島との間をつなぐ来間大橋が開通するまでは、宮古島とは船で行き来していた。生業は、農業が中心となっている。人口の約90%が農業を営んでいる。その中で、農業用水を活用するために、来間の東地区、西地区の整備が行なわれ、サトウキビ、葉タバコ等の作物を生産している。また、肉用牛の生産にも力をいれている。しかし、農業従事者の高齢化、不安定な流通形態や、台風等による自然災害も

多く、島の農業を取り巻く環境は厳しい。現在では、土産屋やカフェ、ダイビング船、グラスボートなど観光事業も増えてきている。来間大橋や展望台は来間島の景観を特徴付ける要素となっている。

来間には、ブナカと呼ばれる島々の神話にもとづく血縁関係がある。宮古島から渡ってきた三兄弟が来間集落をつくったとする神話である。これは、長男家をスメリヤブナカ、次男家をウブヤブナカ、三男家をヤーマスヤブナカと呼び、住民は必ずどこかのブナカに属し、子々孫々まで続いていく。毎年行われているヤーマスウガンという祭礼では、集落内の人々は三家に別れ儀礼を行う。この行事は、現在でも行われており、島外に出た人たちもこの時には各ブナカに戻って参加している。また、ウタキ、雨乞い座のデイゴなど地域独自の重要な歴史的資源が多く存在している。

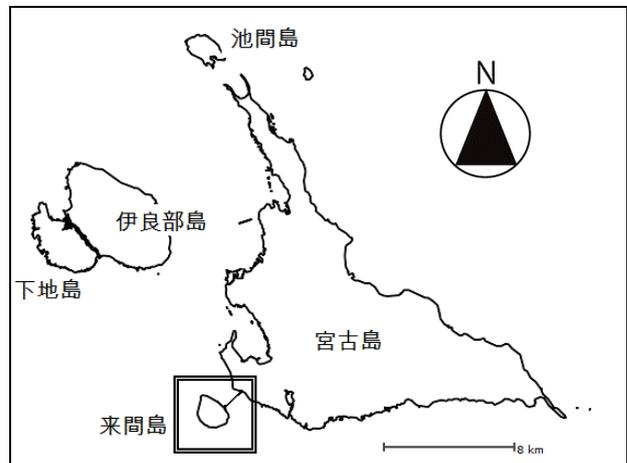


図1 調査対象地

2.2 方位観

来間島では、集落独自の方位観が存在する。来間島にある断層崖が島のほぼ南東の端で海におちこむ岬をアガルヌサツと呼び、北西ノ岬をイルヌサツと呼ぶ。来間島でのアガル-イル（東-西）は、この地形に照応しており、自然方位の南東-北西に近い。これに従って、ニス-パイ（北-南）も同様に、自然方位からずれている。来間島の民俗方位は、自然方位から約45°ずれており、アガン（東）、イル（西）、パイ（南）、ニス（北）と呼ばれている。今後の考察では、民俗方位を用いる。

3. 屋敷と住居

3.1 伝統的な屋敷モデル

屋敷空間については、来間島集落のすべての住居において周囲を石垣や生け垣で囲ってある。その中に主屋、風呂・便所、家畜小屋、物置、トコロ（屋敷の神様）などのそれぞれの空間が配置されている。

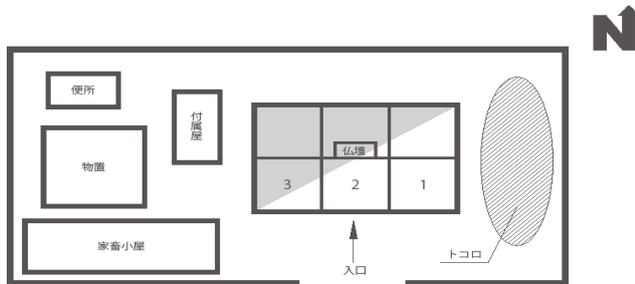


図2 屋敷空間

(1) 主屋

主屋の多くは、屋敷内の北東側よりに配置されていて、南側と西側に庭を広く取る住居が多い。また、南側に門がある場合、門の延長線上に玄関が位置している。

(2) 風呂・便所

以前の来間島集落の住居では、風呂・便所は主屋とは別に独立しており、屋敷内の西から北西に多く配置されていた。

(3) 物置・家畜小屋

家畜小屋として機能している住居はほぼなくなっており、現在では物置として使用されている住居がほとんどである。配置は屋敷内の西側に置かれている。

(4) トコロ

家族の健康と繁栄を願う屋敷神として、来間島集落のどの住居でもまつられており、主屋の東側に配置されている。日常においては手を触れることは禁止されており、神聖な場所として扱われている。

3.2 伝統的な居住モデル

一番座は部屋の中では最も大きく、6畳から8畳ほどの大きさがある。主に客間として使用されるが、夜は戸主の寝室としての機能を兼ねることが多い。床の間と神棚が置いてある。一番座の裏側の部屋をアガンの裏座と呼ぶ。貴重品や書類や衣類をしまっておく部屋だが、子供がいる住宅では、子供の寝室として使用される。

中座は生活の中心となる部屋で、食事やくつろぐための機能をもつ空間である中の裏座は物置として使用される。玄関はなく、客人は一番座、住人は中座の縁側から出入りしていた。祝行事は一番座を儀礼空間とし、客人が多いと中座をつなげて広い空間をつくる。



図3 住居モデル

(1) 神棚

主屋の中心に位置している住宅がほとんどを占めている。また、屋敷から神棚の位置を見てみると、やはり中心に位置する空間構成になっている。玄関から室内を見るとすぐ見える位置にある。

(2) 炊事場

炊事場は主屋とは別にある形態をとっている。簡単な煮炊きや湯沸かしなどはイロリで行い、土間には味噌を入れたカメなどが置かれている。

4. 調査結果

4.1 現在の屋敷構えのしくみ

来間島集落の屋敷空間の分析にあたって、門の位置・向き、門口と仏壇間の位置関係、家屋間の位置関係などに注目して考察していく。

フィールドワークによって得られた30の事例を対象とし、屋敷における門の向きを民俗方位によって4方向に分類、集計したものが図4、図5である。

東側	西側	南側	北側	門なし
12	6	7	0	5

図4 門の向きと軒数



図5 屋敷における門の位置

4.2 屋敷における門の向き

図4によると、門柱の向きは東、西、南の3方向にわかる。これらは基本的には接道条件によるものであるが、北向きの門柱はみられない。

さらに図5にしたがって2方向または3方向に接道している場合を調べる。屋敷の南側が接道している場合はすべて南側に門柱が置かれている。つぎに南側が接道しておらず東側が接道している場合もすべて東側に門柱が置かれている。さらに西側と北側が接道している場合は、すべて西側に門柱が置かれ、北側しか接道していない場合においても北側の道から私道を引き、北側以外に門柱を置くようにしている。したがって、来間島集落内での好まれる門柱の方向は、南>東>西の順であり、北側の門柱は避けられる傾向にある。

4.3 主屋・付属屋の設置個所

図6は、主屋を中心としてどの位置にどんな建物が設置されているかを、来間島集落内の住宅30の事例のデータを元に集計したものである。

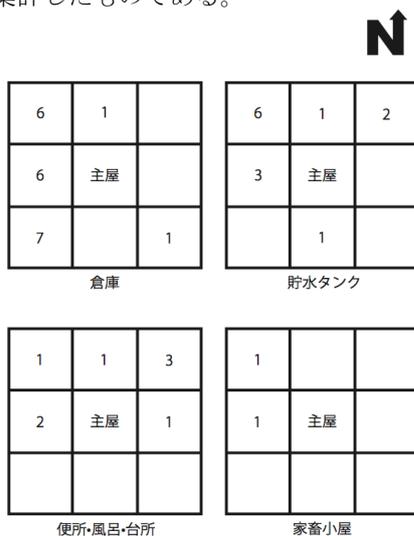


図6 付属屋の設置個所

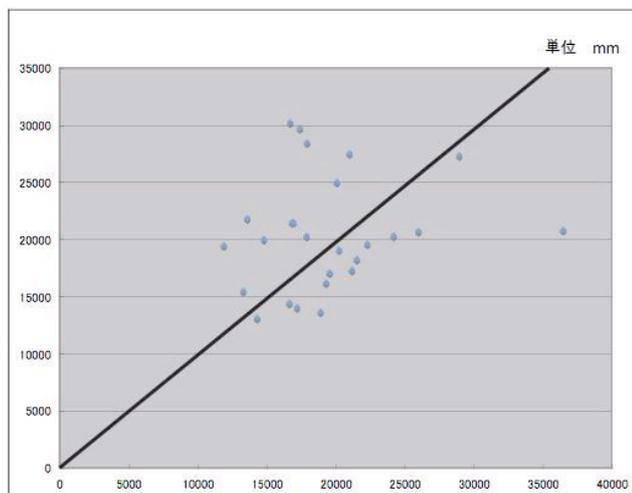


図7 敷地の縦横比

ここでは、屋敷空間を構成する要素の設置個所について述べる。記述にあたっては、敷地の縦方向（11件）のものと横方向（24件）にわけて考察を進めていく。

(1) 縦方向の考察

縦方向の敷地には、東側>西側（敷地の面積）といった傾向が多くみられる。縦方向の敷地は横方向に比べ門口が狭く、付属屋を主屋の背後に設置するため北側が広く取られている傾向がある。

(2) 横方向の考察

横方向の敷地は東側>西側（敷地の面積）といった傾向が多くみられる。横方向が大きくなっても東側の面積はあまり変化はなく、西側の面積が大きくなっていることがわかった。

(3) 付属屋の設置個所

図6を見てみると、倉庫、貯水タンク、風呂・便所・台所が設置されている場所は西側や北側に集中していることが分かる。

これには、屋敷内の空間構成が関係している。屋敷内では東側が神聖な空間、西側が日常的な空間とされている。したがって東側の空間にはトコロなどの神的な要素以外が設置されることはない。他の要素は必然的に西側に設置され、その要素が占める分だけ空間が広がっていると考えられる。

5. 現在の居住空間のしくみ

5.1 居住空間の構成

来間島集落の伝統的な住居モデルは図3のように示すことが出来る。伝統的住居では主屋とは別に炊事場が設置されていたことが前節でわかった。しかし、現在ではほぼすべての住居において、炊事場は主屋と一体になっており、土間、イロリ、三番座あたりに増改築、または新築されていた。

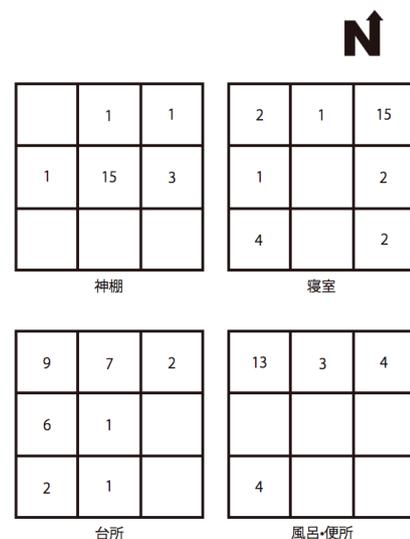


図8 主屋内の設置個所

(1) 神棚

主屋の中心に位置している住宅がほとんどを占めている。また、屋敷から神棚の位置を見てみると、やはり中心に位置する空間構成になっている。玄関から室内を見るとすぐ見える位置にあることは変わらない。

(2) 台所

台所は、日常的空間の代表的な場所の1つである。居住空間では、西側に位置している住宅が大半を占めていることが分かる。もう少し詳しく見てみると、南西側、西側、北西側、北側に台所が位置している。

(3) 寝室

現在では、一番座を寝室として使用する住居がへり、アガンの裏座や三番座を寝室として使用する住居が多かった。

(4) 風呂・便所

現在の住居では、増改築され主屋と一体化している。増改築された場所は大半が西側であった。

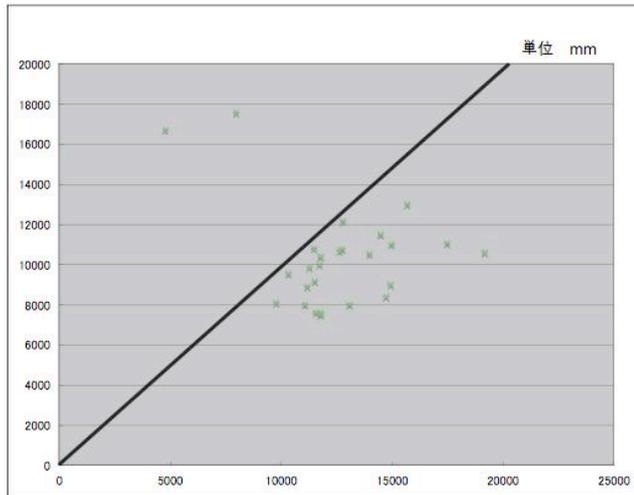


図8 主屋の縦横比

図8は、主屋を縦長と横長の形で分類したものである。これによると、横長の主屋が8割ほど占めている。縦長の2件は、島外から来て最近建てられた住居である。

来間島集落の伝統的住居は横長であることから、増改築を行っていても基本的な空間構成には手をつけず、部分的に変えていることが分かった。

5.2 居住空間の変容

フィールドワークの結果、ほとんどの住居が増改築をおこなっていた。これは、時代の変化に伴いより住みやすい空間にしていることを意味する。

伝統的住居では、土間、イロリが存在していたが、炊事場が主屋と一体化したことによりほとんど残されていない。また三番座も保持されている住居が少なくなっていた。これは家族構成の変化により空間構成が単純化してしまい、もともとあった高齢者の居室といった機能を失ったと言える。

一番座については、伝統的住居では設けられていた床の間がアガンの裏座へと移行しており、新しい方向性がうかがえる。これは、以前の機能が薄れていったこと、集落内の行事により広い空間が必要とされ、一番座とアガンの裏座を繋ぎ対処していた。本来閉鎖的空間であったアガンの裏座が、集落内で開放的空間へと変容していると考えられる。

つぎに中の裏座に着目すると、縮小されている傾向にある。家族構成の単純化により中の裏座の機能が別の部屋に分散し、中の裏座は中座に取り込まれる傾向にある。これもアガンの裏座と同様に閉鎖的空間であった裏座が、生活の中心としての機能を持つ中座に取り込まれることにより、開放的空間へと変容していることを示す。

伝統的住居では部屋と部屋はふすまで仕切られていたが、最近では一番座、中座と各裏座の間、または中座と三番座の間に廊下が設置されている住居が増えていた。これは、各部屋の通路化を避けるためと考えられ、個人のプライバシーを保護するという傾向がみられる。

これらの傾向から、ムラ生活を中心としていた間取りから、家族生活、さらには個人生活を中心とする間取りへと変容していると考えられる。

来間島集落は、離島という閉鎖性が強く、外部からの影響を受けにくいいため、他の地域に比べ変容は緩やかなものとなっている。間取りの基本的な構成を変えることなく増改築がおこなわれていることで、持続する側面を捉える事ができる。しかし近年では、床の間を伝統的な形式と無関係に設置したり、各部屋を廊下で分離させるなど、ムラ生活と家族生活を切り離す傾向もみられる。

6.まとめ

来間島集落では、従来、信仰にもとづいて居住空間が構成されてきた。屋敷空間、居住空間の構成から神の存在が関係していることは明らかであった。来間島集落では多くの儀礼が存在する。儀礼により昔から現在へとそうした信仰が伝承され、来間島集落は独自の集落空間を形成してきた。

しかし、現在の居住空間の分析から、来間島集落の住民は時代による変化に伴い居住空間をうまく変容させている。ムラ生活から家族生活、そして個人生活へと生活の形態が変化し、新たな空間を生み出していくのである。

参考文献

- 1) 『下地町誌』、1989。
- 2) 野上公久、畑聡一、丸地弾、加藤智泉、田中潔
「来間島の屋敷構えの構成法とその使われ方」 p.3-4。
- 3) 森健二「来間社会の二次元構造とブナカ」 p.7-24。